

高山寺蔵『五教章上卷聞書』について

——あわせて明恵関係片仮名交り文資料の類別案に及ぶ——

柳 田 征 司

目 次

- 一、はじめに
- 二、『五教章上卷聞書』
- 三、明恵の注釈書と講義聞書、ならびにその流れをくむ資料
- 四、おわりに

一、はじめに

筆者は、室町時代に盛行した抄物の源流を求めるといふ立場から、抄物の時代に直前するところの鎌倉時代の注釈活動と講義聞書とに注目し、特に、資料が豊富で、また講義と聞書作成の実態がかなり具体的に把握できるものとして、明恵の講義とその聞書をとりあげてきた。⁽¹⁾

本稿は、高山寺経蔵に伝存する片仮名交り体の注釈書『五教章上卷聞書』が明恵の講義の聞書であることを明らかにしようとする。そして、これを機会に、この資料を含めて、今までにとらえることの出来た明恵の講義の聞書を中心に、さらに広く明恵関係片仮名交り文資料を全体として類別整理する一案を提出して、鎌倉時代語研究に資せんとするものである。

二、『五教章上卷聞書』

(一) 書誌

高山寺経蔵に「五教章上卷聞書」と題する片仮名交り体の注釈書が二部四冊伝存する。即ち、重文第四部第一二三函第一八号から第二一七号までの四冊がそれである。このうち第二〇号と第二一七号とが上下二巻の僚巻で、明暦元年（一六五五）の写本であり、第一八号と第一九七号とがやはり上下二巻の僚巻で、先の本を天和二年（一六八二）に転写したものである。次に、二本の書誌的な解説を簡略に付す。

○五教章上卷聞書 二巻 明暦元年琳弁・永弁写 袋綴二冊（第一二三函第二〇号・第二一七号）

共表紙（縦二九・〇糎×横二一・四糎）。外題打付書「五教章上卷聞書上（下）自一乘義至分教開宗（自乘開合至施設異相）」。
表紙右方に「二冊之内 梅尾高山寺／賢首院」と墨書。内題「五教章上卷聞書上（下）」。
半面一一行。朱匂切を加う。卷上四九丁、卷下二七丁、各卷末に次の奥書がある。

（卷上末）明暦元年林鐘十一日東大寺中於／金珠院津坂隱侶小庵下四聖坊之／以御本書寫了下卷先日書功了／高山寺／華嚴宗末学／琳弁 /（朱書）「即日／対十無尽院永弁御房／一校了」／此聞書上下二卷梅尾上人／御一義ト云、今於本寺／大依之会釈アリ 英性御房被命了 /（別筆）「海印漫書」

（卷下末）本云／応永廿七年六月十三日於觀智院書寫了 / 文安元年八月廿六日於東寺觀智院堂／書寫了／阿闍梨宝海／明暦元年五月廿六日於東大寺／四聖坊御本申出寫了之了／花嚴末葉／永弁 / 助筆／琳弁／于時東大寺四聖坊阿智御講談之砌也 /（朱書）「即時一交了」

○五教章上卷聞書 二巻 天和二年永弁写 袋綴二冊（第一二三函第一八号・第一九七号）

右の本の転写本。共表紙（縦二九・三糎×横二三・〇糎）。外題打付書「五教章上卷聞書上（下）自一乘義至分教開宗（自乘）教」

(朱書右傍補入) 開合至施異相。」表紙右方に「二冊之内 梅尾山／闕伽井坊」と墨書。内題「五教章上卷聞書上下」。半面一一行。朱句切。卷上四五丁、卷下二四丁。各卷末に次の奥書がある。

(卷上末) 写本云／明暦元年林鐘十一日東大寺中於金珠／院津坂隱侶小菴下四聖坊之以御／本書寫了／高山寺／花嚴宗末学／琳弁／即日／对十無尽院永弁御房／一校了／此聞書上下二卷梅尾上人御／一義也ト云々今於本寺大□／之会釈アリ英性御房被命了／件本東大寺五教章聽聞之砌／借出之琳弁□寫了 重□／又大切為本故写取之早 惡筆可／恥之／于時天和二年九月「三」(某字に重ね書き) 日／花嚴末子／永弁

(卷下卷) 本云／応永廿七年六月十三日於觀智院書寫了／文安元年八月廿六日於東寺觀智院堂／書寫了／阿闍梨宝海／(朱書)「二校之了」／明暦元年五月廿六日於東大寺／四聖坊御本申出写之了／花嚴末葉／永弁／于時東大寺四聖坊四智御講談之砌也

後者は前者の転写本であって、二本の本文は助詞の有無などを除くと大きな異同をもたない。『五教章』の注釈書には、『仏書解説大辞典』や『国書総目録』によると種々のものが伝存するようであり、『五教章上卷聞書』なる書名のもも見えるが、いずれも未調査のため、本書との関係は明らかでない。後者によると『五教章上卷聞書』は高野山宝亀院(室町時代写二帖)と東大寺(二冊)に伝存するという。高山寺本は、右の奥書に見るように東大寺において書写された本であって、東大寺に一本が蔵されていることは看過できないことである。後考を期したい。

(二)原典

『五教章上卷聞書』の注釈の対象となっている原典は、唐法蔵(六四三～七二二)撰の『五教章』(華嚴五教章・華嚴一乘教義分齊章・華嚴一乘教分記・華嚴經中一乘五教分義・一乘教分記)である。本書は『大正新編大藏經』(第四五卷四七七頁以下)等にも翻刻されているが、高山寺には上巻が三点伝存する。一点は巻中も存す。

○華嚴一乘教分記卷上・中 鎌倉初期写 奥書・行間書入明恵自筆 粘葉装二帖(第一部第二三〇号)

高山寺蔵『五教章上卷聞書』について

薄茶色表紙(縦二六・五糎×横一七・八糎)。外題表紙左方に「華嚴五教分記」と墨書。内題「華嚴一乘教分記」(卷上)法藏撰。押界半面七行。界高二〇・三糎、界幅一・八糎。各丁裏打。卷上全三九丁。高山寺朱印。朱句切点。稀に仮名点あり。卷上末に明惠筆の次の奥書がある。

哀哉、 「 」(擦消) 南山ノキハニ船ノ一艘イテキタリツルカホトナクハセトヨリテ北山ニカクレナムトスル気色ヲミレハ此耳キレ法師カ一生涯ヲハセワタラムホトモアレニコトナラヌカナト思テノ双眼ニナミタウカフ筆ヲソメテ如此カキサンテマタ筆ヲソメム「ト」(右傍補入) スル便ニミヤリタレハ船ハノステニ北山ニハセカクレニケリ弥アハレヲモヨヲスモノカナ / 建久八年 壬六月五日任愚見少抄勘文了是偏非他乞者雖住紀洲山中猶副日逐電之志不絶仍旅行之時為奉懸頸結構之末学糸惜可被思也於紀洲山中巖上菴室記之 成弁 / 于時西海以外ニナキ「タ」(右傍補入) リ船少々アリ / 此本ハ文字以外多紕繆無言本故不直之也 / 建久八年壬六月四日今夜 西海ニ入ツルヲ船

見 ヨ ヨ

○華嚴一乘教分記卷上 建長六年写 粘葉装一帖(第四部第二二三函第一号)

共表紙(縦二六・一糎×横一六・五糎)。表紙に「上 東第十四箱」と墨書。表紙見返に「心蓮院」と墨書。内題「華嚴一乘教分記卷上 法藏撰」。押界半面八行。界高二二・二糎、界幅一・七糎。行二二字前後。全二九丁。次の奥書がある。

(別筆)「心蓮院施入了」/ 建長六年六月二日於方便智院菴室ノ書写畢 沙門明耀之ノ須ク同異也

モチイルヘキ

○華嚴一乘教分齊章卷上 南宋時代刊 折本一帖(第四七函第一四号)

薄茶色表紙(縦三一・六糎×横一〇・八糎)。ただし本文は縦三二・一糎×横一一・一糎。内題「華嚴一乘教分齊章卷上」京大薦福寺沙門 法藏 述。「高山寺」朱印。天地界。一頁六行。一行二〇字。版心「教義章上 二二(十八)」。次の刊記あり。

(第二紙版心) 疏首王沢捨錢開此一板

(第三紙版心) 女弟子曹氏捨錢開此一板

(巻尾) 当湖王彦珣造

(三) 講者ならびに聞書者

先に引いた奥書に「此聞書上下二巻梅尾上人御一義ト云、今於本寺ノ大依之会釈アリ英性御房被命了」とある記事が信用できるものであるならば、本書は梅尾上人明恵の説ということになる。この奥書は信頼できるものであろうか。

伝来を語る奥書を見ても、応永二十七年にこの本の原本が東寺観智院にあったことまでは確認できるが、その本が明恵の講義の聞書であるのかどうか、またどのようにして東寺観智院に伝存していたのかは記されていない。しかし、問題の奥書中に見える英性は、鷲尾順敬『増訂日本仏家人名辞書』によると、慶長一六年(一六一二)誕生、延宝五年(一六七七)寂、東大寺の学僧で『五教章』を講じたという。従って、この問題の奥書は、明暦元年に琳弁がこの本を写した時に書かれたものであると見られる。「今於本寺大依之会釈アリ」とは、東大寺において『五教章』を解釈するのに『五教章上巻聞書』に依って行っていたということを言っていることになる。この聞書によって『五教章』を講じていたと見られる英性や円智にすめられて、琳弁がこの書を写しているのであるから、この聞書が明恵説であるという言の信憑性は相当に高いものと考えられる。そして、だからこそ、永弁と琳弁とはこの聞書を書写したものと考えられる。伝存する明恵の注釈書や明恵の講義の聞書などを見ると、永弁・琳弁が転写した本がいくつか高山寺に残っている。

『高山随聞秘密抄』 寛文五年(一六六五) 琳弁写

『華嚴仏光観聞書』 寛文六年永弁写

『梅尾説戒日記』 寛文九年永弁写

『華嚴唯心義』 卷上 延宝八年(一六八〇) 琳弁写

『光言句義釈聴集記』 貞享元年(一六八四) 永弁写

高山寺蔵『五教章上巻聞書』について

永弁と琳弁の二人は、明恵の学問を整理して、この学を再興しようとする志をもっていたのである。⁽²⁾

このように見て、この聞書が明恵の説を記したものである信憑性は高いと見られるのであるが、このことは、原典『五教章』が明恵にとって非常に重要な書物であり、従って、彼がこれを書写したり、そして講義していたことから裏づけることができる。即ち、先に記したように、明恵は原典『華嚴一乘教分記』本文の行間に注を書入れている。ただし、その行間書入れ注が聞書の方に利用されているという事実はこれを認めることができないうである。しかし、また、『五教章』の寿靈(七五七―七九一)によるとされる注釈書『花嚴五教指事』に明恵筆の本が高山寺に伝存している(第一部第二三二号)のであるが、聞書にはこの『指事』の説が利用されている。『五教章』を注釈するためには明恵でなくてもやはり『指事』を利用したはずであるけれども、明恵が『五教章』に深い関心をもっていたことを知る。

能尺所尺事 花嚴ヲ所尺トトリ一乘以下ヲ能尺トトルナリ是ハ即指事ノ尺也(上1ウ10)

聞書の他の部分でも『指事』を参照しているところは少なくない。

そして、『高山寺明恵上人行状(漢文行状)』によれば、明恵は『五教章』を講義しているのである。

大疏演義抄并ニ起信義記五教章披談之ヲ(上山本中)

そして、更に、『高山寺明恵上人行状』が『漢文行状』の一節を注して、

△高山寺者号十無尽院ニ後改高山寺ニ中巻云ノ建永元年十一月高尾ノ一院梅尾被下後鳥羽院ノ々宣賜之、ト此処ニ興隆花嚴宗ニ号高山寺ニ云ノ五教章上巻云、謂ク此ノ一乘ハ要々在初時第二七日ニ説ク猶如ニキ日ノ出テ先ツ照ニスカ。高山ニ等ナリ

と注しているのを引くまでもなく、「日出先照高山」は『五教章』上巻中に見える句であって、この一事をもつても明恵がこの書をいかに尊重していたかを知ることができる。聞書はこの部分を次のように注釈している。

猶如日出先照高山文是ハ性起品ノ喩也日ノ初テ出ル時キハ先ツ必ス高山ヲテラスカ如ク仏日初テ出テ、必ス円機ヲテラス也次ニ日ノ次第二余山乃至幽谷ヲテラスヲハ漸ク末教ヲ説クニ喩フル也次ニ日ノ西山ニ傾ムク時キ還テ迷盧八万ノ頂

ヲ照ス還照高山ト名ク是則法花ヲ説テ三乘機ヲ花嚴一乘へ入ル、ヲ云也(下6ウ5)

そして、以上の傍証によるところを決定的にするのは、聞書下の本文に一箇所次の注記が見えることである。

答ニハ二ノ義アリ林師云一ニハ一代ノ教ニ化制ニ教アリ制教ニハ同時同処ヲサマタケス今ハ化教ノ事ヲ云カ故ニ同時同処ナシ

ト云也上御答云一義云古仏ノ本戒ヲ誦スルカ故ニ本戒ナル方ハ本教ト一ニ本ノ外ニ末教ヲ不レ見末教スカタニテ同時同処ナル

ハ無シト云也梵網ハ本戒方ヨリ全ニ本教トミナシテ末教ヲ不レ見様ヲ云也私云元徳ノ尺等ニ故テ云也或人義云一代ヲ初中後ノ三ニワクルニ成道ノ

初ツ方ナラハ二七日乃至一年二年ノ後ニ説テ初結并波羅提木又ト云ヘシ(下略)(下9ウ5)

先の與書に「梅尾上人御一義也ト云、」とあるのは、右引用部分に見える「上人御答云」「一義」によっていたのであろう。

一方、「林師」は義林房喜海である。従って、この注記によれば、この聞書は喜海を「林師」と呼ぶ人物が書いたものといふことになる。「林師云」で思い合わされるのは、これが、『解脱門義聴集記』にも見えることである。『解脱門義聴集記』は、明恵の講義を喜海が記録し、これを高信が整理記録したものである。従って、『五教章上卷聞書』の場合も、喜海を林師と呼ぶ人物は、喜海と兄弟弟子である蓋然性が高いのではないかと考えられる。その人物も明恵上人の講義を聞き、同じ講義を聞いた喜海の説をもとりこんで聞書を作成しているのではないかと考えられる。

(四)注意される若干の言語事象

本聞書は仏典の注釈であり、固い文語体で書かれているため、言語研究の立場から注目される事象は多くはない。先ず注意されるのは、他の明恵の講義の聞書の場合と同じく本聞書にも声点がさされた語があることである。この点からも、本聞書が明恵の講義の聞書の類の一本であるとする先の推定が支持されると思われる。

○此海印三昧ヲ出入ノ三昧トハコ、ロエテ、ユヘハ、コソ諸尊ニ通ストイフテ第二会ヲモカヌレ(上3ウ6)

○マ、ケ、アル眼ノ虚空ニ向テ花ヲ見ルカ如シ(上48オ10)

○ヒトリタ、チナルモノ、無カ故円融スル也(下8ウ2)

文脈の支えを得てもなお意味をただちにはとりにくい部分に声点がさされているものようである。固い文語体でありながら、俗語的・口語的な事象も若干顔をのぞかせている。

○此証智ノ境トミツル教ヲ又因人ノ方ヨリハ權教トユヘハ也(上6ウ5)「ユヘハ」の例は先に引いた声点の例中にも見える。

○一切ノ法ハ流入スルコサナレトイヒツヘキ也(上15オ1)

○当山御義ニハ不一モコ、ニハアラウスル也トカヤ(上16オ8)

○是ヲ折薪記ハ此文ハタ、一ヲアケテコレニウチカヘメ心エフスル也トカヤ(上17オ5)

○当世ノ人取ミタラカシテ仏果ノ法門ト云モ一向即果分ト一ツニ心得タリ(上5オ1)「ミタラカス」の例は、他にも上5ウ4、上6ウ6に見える。

○義ヲハマキラカサネトモ同クハイタモフツクエモ木ノ躰同シキカ故ニ此フツクエノ処ニハタ板ノ躰ヲオサム(上5ウ10)

○若シニ乗ハカリヲ云ラムタノトノ各乗大車ホトイワハ可^レ有^レ失^レ(上10オ8)

なお、『類聚名義抄』を利用したかと思われるところがある。ただし、この注は、片仮名交り文の注釈の中で異質の感があるから、聞書の原形に存したのではなく、転写を経る間に加えられたものであるかも知れない。

○攪^{ラム} サハク^{トル} アツム^{カ、ミル} モツ^{サクル} (上26オ6)

○涙^{ラム} ミム^{ツツマル} ツツマル^{ツクヌ} ホロフ^{キユ} シツム^{シツム} (上26ウ6)

○絡^{ラク} ノ^{ラサム} (下4ウ7)

モトラル^{ヨル}

高山寺本『類聚名義抄』はこの字の部分に欠いているが、観智院本によると共通する訓が多い。⁽³⁾

三、明恵の注釈書と講義聞書、ならびにその流れをくむ資料

明恵関係の片仮名交り文資料は、近時国語史研究資料として次第に注目されるようになってきた。⁽⁴⁾ 筆者も関係資料の発掘と整備につとめてきたが、右においては、『五教章上巻聞書』をその一つに加えることができることを明らかにした。関係資料が次第に出そろって来たところで、ここでは、『五教章上巻聞書』などの資料を中心として、明恵関係の片仮名交り文資料を類別整理する一案を提出してみたいと思う。明恵関係片仮名交り文資料は明恵資料と、その流れをくむ資料とに分けられる。前者から見ることにする。

(一) 明恵資料

『五教章上巻聞書』を例にとると、この資料は、資料の性格から言って二つの性格をもっている。一つは、それが原典『五教章上巻』に対する注釈であるという性格であり、もう一つは、明恵の講義の聞書であるという性格である。今まで筆者が整備につとめてきて、注1の4の拙稿などで取扱った『光言句義釈聴集記』『納涼坊談義記』なども、やはり、注釈書であって、講義の聞書として成立したものであるという二面の性格をもつ。従って、これらの資料を明恵関係の片仮名交り文資料の中に正しく位置づけるためには、この二つの性格を軸にとって、これに関連する資料との関係を明確にすることとが考えられる。二分法によれば注釈に対するものは非注釈、講義聞書に対するものは講義を經ない著作ということになる。

	聞書	注釈
著作	甲一類	甲二類
	乙一類	乙二類

逆に著作に対するものとして講義聞書を考えると、講義というところえ方は原典についての講義という特定の場合に限られる響きをもつから、広く聞書とする方がよいであろう。このようにして、右の二つの視点を縦横の軸にとった資料類別の図を作ると、次のような四類の資料を認定することができることとなる。即ち、注釈を一類、非注釈を二類と呼び、聞書を甲類、著作を乙類と呼ぶことにすると、甲一類・甲二類・乙一類・乙二類の四類に分けられることになる。注釈とい

うことを第一規準として、その上に立って二分法で非注釈を対置したために、乙二類、即ち注釈書でなくて聞書ではない著作などは、種々のものを含み込んでしまうこととなっている。『光明真言土沙勸信記』のようなものから『明恵上人歌集』までも含み込んでしまうことになる。従って、縦軸の非注釈はこれを細分し乙二ノ一、乙二ノ二……、又は乙三、乙四……とすることも考えられる。

そのような問題を残すけれども、今は、伝存する資料の量が最も多いところの甲一類を中心に、これと密接な関係にある甲二類、乙二類の資料を整理してみたい。⁽⁵⁾

甲一類

『納涼坊談義記』嘉祿元年（一二二五）明恵講隆詮聞書 一帖

『花嚴信種義聞集記』嘉祿二年か明恵講 有欠四帖

『解脱門義聴集記』貞応三年（一二三四）か嘉祿二年か明恵講喜海聞書高信整理 一〇帖

『光言句義釈聴集記』寛喜元年（一二二九）明恵講 二軸

『五教章上巻聞書』明恵講喜海等聞書某整理

甲二類

『梅尾御物語』諸種の聞書を集めたもの道棟類聚か 三冊

全体としては甲二類に属するものであるが、聞書の中に、建暦三年（一二二三）の明恵の『大日経疏』の講義、寛喜元年の明恵の『光言句義釈』の講義の聞書を含んでおり、甲一類に属する部分もあることになる。

『高山随聞秘密抄』明恵談靈典聞書光経類聚 一軸

『明恵上人遣訓抄』明恵談某文暦二年（一二三五）記

『五秘密口决』明恵談高信聞書か 二軸

『梅尾説戒日記』 明恵談長田聞書 一帖

『却廢忘記』 明恵談長田聞書 二冊

『真聞集』 明恵談隆弁聞書 七帖

乙一類

『華嚴唯心義』 明恵注 二帖

甲二類の中には、『梅尾説戒日記』のように、ひとまとまりとして、ある時の明恵の談するところを聞書したと見られるものから、『高山随聞秘密抄』や『真聞集』などのように明恵につき従ってその都度聞いていたことを記したと見られるものまで種々のものがある。後者は、聞書とは言っても、著作に近い性格をもっていることになる。

(二)明恵資料の流れをくむ資料

次には、右に取り上げた明恵資料にいろいろな意味でつながっているところの、いわば明恵関係資料を取り上げる。明恵資料につながるとは不明確な表現であるが、具体的には二種類のものがあると思われる。一つは、右に見て来た注釈活動に連続するもので、明恵の説を継承しながら、明恵の学統につながる者が作成した注釈書である。先の類別に従えば甲類に属し、甲一類も甲二類も存するものと思われる。もう一つは、明恵の伝記資料がそれである。これは先の類別に従えば乙二類ということになる。もっとも、高山寺蔵『上人之事』は明恵の語ったところを禅浄房なる弟子が筆録したもので、(一)の明恵資料の方に位置づけ、その甲二類とすることもできる。ただ、喜海の著をもとに増補展開していったと見られるいわゆる伝記系諸本のことを考えると、伝記類は(二)に位置づけ、その乙二類とするのがよいのではないかと考える。甲一類の資料を中心にそれに密接に関連する甲二類・乙一類を整理しようとする本稿では、個々の伝記資料の位置づけは省略に従う。⁶⁾

さて、前者にかえって、明恵の学統につながる者が、その所説の影響を受けて作成した注釈書類については、いまだその発掘がはじまったところである。既に、(一)にあげた『解脱門義聴集記』などは、明恵の講義を喜海が聞書し、それを高信が

整理したものであるが、高信はこれによって講義を行っており、この注釈が弟子から孫弟子へと継承されていく姿を見ることが出来る。筆者のとらえることが出来ている資料で、この類に属すると見られるものは次の通りである。その言語から見て、甲一類ではないかと見られる『華嚴仏光観聞書』のようなものもあるが、概して講義の聞書であるのか著作であるのか確認できない。そこで、ここでは甲一類と乙一類とを分けずに列挙する。

『華嚴仏光観聞書』 明恵の弟子乃至はそれにつながる者の講義の聞書か 一帖

『仏光観并合行聞書』 一帖

『起信論本疏聴集記』 順高注

『起信論別記聴集記』 順高注

『四卷抄一卷不審事』 定真の弟子注か 一紙

『四卷抄聞書』 仁弁講弁耀聞書 一軸

くだっては、寛永十四年成立の顕証の『光真言句義釈鈔』（二冊）や江戸初期成立と見られる撰者未詳の『光言抄私』（二冊）『光言私記』（二冊）もあるが、鎌倉時代語の研究という視点からは、今のところ先の六点があげられるに過ぎない。

四、おわりに

本稿は、高山寺に伝存する『五教章上卷聞書』が、明恵講義の聞書の一つに加えることができるものであることを明らかにし、これを機会に、注釈・聞書という二つの視点を軸に、明恵関係片仮名交り文資料を類別整理するしかたの一案を考えてみたものである。

(一) 明恵資料

甲一類・甲二類・乙一類・乙二類

(二)明恵資料の流れをくむ資料

甲一類・乙一類・乙二類

この資料類別案は、先ず成立時期によって(一)と(二)に分け、ついで、注釈か非注釈かといういわば言語資料ジャンルのちがいと、聞書か著作かという成立のしかたのちがいとを軸にとつて分けたものであって、明恵関係資料を言語資料として扱うには、このような配慮をしかかた方がよいのではあるまいかと思われる。しかし、実際に、この類別案によって分けられた類によって、その言語に何らかの相違があるのかないのかについては、今後明らかにしていかななくてはならない課題である。

それとともに、そのことを通して、非注釈と一括してある部分を細分する試みも必要であり、また、類別した群への命名も必要であるが、それらも今後の課題としたい。

注

- (一) 1 『明恵上人資料第二』(分担執筆 東京大学出版会 一九七八・三)
 - 2 『高山寺蔵鎌倉時代後期書写題末詳仏書注釈書』(鎌倉時代語研究一 一九七八・三)
 - 3 『鎌倉時代の注釈活動』(同右三 一九八〇・三)
 - 4 『明恵上人の講義とその聞書』(高山寺典籍文書の研究)東京大学出版会 一九八〇・一二)
 - 5 『高山寺蔵本不空羼索毗盧遮那仏大灌頂光明真言句義釈』(同右)
 - 6 『高山寺蔵『四卷抄聞書』について』(鎌倉時代語研究四 一九八一・五)
 - 7 『高山寺伝存の仮名交り注釈書類一斑』(昭和五十六年度文部省科学研究費(総合研究(A))「高山寺所蔵の典籍文書の研究並に『高山寺資料叢書』の編纂」研究報告論集 一九八二・一)
- (2) このほか、永弁は、頭証が寛永一四年に『光言句義釈聴集記』をもとに自説を加えて作成した『光真言句義釈鈔』をも天和三年に書写している。

- (3) この和訓が観智院本の『類聚名義抄』のそれと近いことは近藤泰弘氏が指摘された。

- (4) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(広島大学文学部紀要特輯号三一 一九七一・三) など。
(5) それぞれの資料の伝本その他書誌的な事柄は省略する。注1の拙稿などを参照。
(6) この点については『明恵上人資料第一』を参照。
(7) この聞書については、後考を期したい。文中に「林師ノ云ク」(2ウ9)「上人口伝ニ」(1ウ5)「上人ノコン案」(4ウ)と見える。
〔付記〕 高山寺当局各位の御芳情に謝意を表するとともに、小川良様の御冥福を祈り上げます。